

# 印相学®

太田清文著

定価二、五〇〇円(税込) 送料三一〇円

## 印章の吉凶の解説

唯一、印相学の伝統を二子相伝で受け継ぐ太田清文師が、本モノの印相学の印鑑とは何か——を事例をあげて、その奥義をわかりやすく解説した新書。

規定書送呈(ハガキ又は電話で御請求下さい)  
六世宗家 太田清文  
(東京出張所)  
〒108-0073 東京都港区三田  
三田一丁目二丁目二〇二号  
J R 田町駅地下鉄三田下車、要予約  
(面会日時毎週金⑤⑥⑦午後時々五時迄)  
電話〇三三四五二一六五二番

「印相学」は宗家三世が明治時代に創作した名称であり「印相学」「印相学印章」「印相学宗家」「日本印相学会」の名称は登録商標です。太田清文撰作に依る印章及び印刷物にのみ使用が許されており

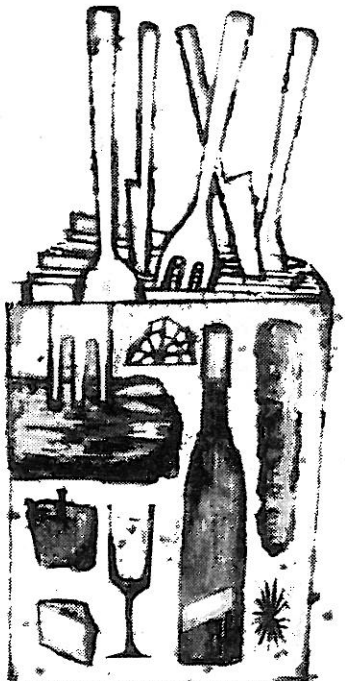
神奈川県大磯町照ヶ崎海岸1342  
日本印相学会  
〒255-0003 電話 0463-61-0002番

# やわらかなレタス

連載 第36回

## 江國香織

イラストレーション 福田利之



### おいしいそうな食事

ジャック・ケルアックとウィリアム・パロウズの共著だという小説を読んでいたら、とてもおいしいそうな食事の描写があった。舞台は一九四四年の、夏のニューヨーク。若い男性四人と女性一人が、あるアパートの一室に集まっている(彼らは、誰が誰とどこに住んでいるのか、読んでいてわからなくなるくらい頻繁に、互いの住いを往き来している)。そのなかの二人が、自分たちは船員の

仕事が入り、あした船出するから夕食を奢ってほしい、と言う。言われた「おれ」(ウィルという名前だ。ウィルが一人称で語るこの章は、パロウズが書いていた)は、「おまえたちが絶対にいなくなるなら、コロニーに連れてってやるがね——確信が持てないから妥協してうちで食おう」とこたえて、紙に、買ってくるべき食料を書きつける。ステーク、デュボネのボトルとセルツァー水、ブルーチーズ、イタリヤパン、バター、リンゴ、デュボネ用の水。「ラムはどう？」と一人が提案するが、「おれ」は、「ダメだ。夏のドリンクとしてはデュボネのほうがいい」と、きっぱり退ける。買物に行く男性二人が、「おれ」のひきだしから「ジムで運動するときに時々使うショートツを着」をひっぱりだして、部屋のまんなかで着替える。一九四四年にジムで運動するときにはくショートツというのがどういふものか、私は知らない。でも「おれ」が、「おまえらそんな格好で公道に出かける気か？」と言ったり、「わいせつ物陳列罪で逮捕されちまう」と言ったりするところを見ると、へんな代物

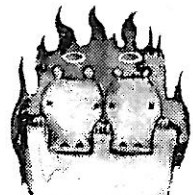
なのだろう。でも二人はその恰好のまま、お目つけ役(?)のもう一人と三人で買物にでかける。そして、ばらばらに帰ってくる。魅力的なディテイルは他にもあるのだが、ともかく食料が揃い、「おれ」は袋を開けると品物を引っ張り出し始めた。見事な分厚いステーキ、新鮮で湿ったブルーチーズ、小さなリンゴの袋、長いイタリヤパン。おれはリンゴを掲げて『こいつはチーズと実に合う』と言った。誰かがデュボネの栓をあけ、誰かが「各種目的に使っている投げナイフ」で氷を砕く。セルツァー水で割ったデュボネを銘々がのみながら、誰かが最上階の廊下のガラストープでステーキを焼き、誰かが手伝ったり手伝うのをやめたりし、誰かがT・S・エリオットを、誰かが「ヨーロッパ」という本を読みながら待つ。誰かはそこにいる唯一の女性であるヘレンと、「ネッキングして脚をさすり始め」る。そして見事なステーキが焼ける。まず一枚、次に二枚。みんな「一切れむした」り、「歯で引き裂いた」りしてたべる。「おれ」は塩気が足りなかったたので、氷箱のてっぺんから塩を取って「くる。誰かが「ヒョウのようにうなり始め」、みんな

な真似をして、うなりながら肉をたべる。ステーキがなくなり、次に「チーズとイタリヤパンとリンゴを食べたが、すばらしい組み合わせだ。それからみんなすわってタバコに火をつけ、デュボネをほとんど飲み干した」。そして、誰かがこう言う。「ドアは開けていてくれよ。空気を入れ替えないと」

アパンというのも、どういふものなのかよくわからない。でも、大事なのはそんなことではない。ここですべてをおいしそうにしているのは、部屋であり友人たちであり、ラムの提案および却下であり、ジム用ショートツであり、ストープであり氷箱のてっぺんに置かれた塩であり、空気を入れ替える。人が満ち足りた食事をするとき、必要なのはそういうものだ、とわかってびっくりした。おもしろい、でも言われてみれば大変納得のいくことだ。

これから読む人の興をそぐので多くは語れませんが、後半にでてくる「こんな寂しいビルは初めてだった」の場面も秀逸です。はともかくおもしろく、かつ文章の手際が清潔で、ケルアックとパロウズはやっぱり二人とも天才だな、と一読素直に感じたので、訳者があとがきで謙遜(?)しすぎなのが気になった。「あくまで習作レベルにとどまるもの」と書いてあったけれど、そうかなあ。もっとも、この本にはもう一つ別なあとがきもついていて、ジェイムズ・W・グラワーホルツという人物(訳者あとがきによると、「パロウズの愛人秘書で遺産管理人」らしい)が、ただことではない熱っぽさで過剰さでこの本を解説しているの

で、訳者はバランスをとるといふか、読者をクールダウンさせる必要を感じてしまったのかもしれない。ところで、この小説のタイトルは、『そしてカバたちはタンクで茹で死に』(河出書房新社)という。作中で、ラジオのニュースのアナウンサーがそう言うのを、登場人物たちが車のなかで聞く。これは現実にあったサーカスの火事のニュースで、ケルアックとパロウズがある晩バーにいらるときに、ほんとうに聞いた言葉だという。サーカスの火事は勿論痛ましい悲劇だが、シェールで滑稽どころか優雅な、完璧なタイトルだと思ふ。



えくにかおり 1964年生まれ。04年『号泣する準備はできていた』で直木賞受賞。他の作品に『東京タワー